堀 文子と大磯

高麗山の麓のアトリエで
生涯現役を貫いた画家

HORI Fumiko

2022年 1月22日(土)～2月20日(日)

開館時間　9:00-17:00（入館は16:30まで）
休館日　月曜日・毎月1日
入館料　無料

大磯町郷土資料館〈企画展示室〉
Oiso Municipal Museum

主催　大磯町郷土資料館　一般財団法人 堀文子記念館
協力　株式会社 ナカジマアート

《樹霊》（2007年）

撮影：飯島幸永

1918年東京麹町に生まれた堀文子は、幼少の頃から自然界の営みに興味を持ち、科学者を夢みるが、当時の女性に学者の道は厳しく、芸術の道で自立しようと、女子美術専門学校（現女子美術大学）師範科日本画部に入学する。在学中に新美術人協会第2回展に出品、初入選を果たす。戦後、創造美術、新制作協会日本画部、創画会に属し、新しい日本画を目指す革新的なグループで活動を続け、34歳で第2回上村松園賞を受賞。42歳で夫と死別し、3年に渡り、エジプト・ヨーロッパ・アメリカ・メキシコを旅する。堀文子が大磯町に転居したのは、海外放浪の旅から帰国後の1967年47歳の時だった。長い海外生活で、森の中で自然と共に生きたいという願いを強くもつようになった堀は、東京から遠くなく、相模湾を望み、豊かな自然に囲まれ、急行の止まらない、温泉のない、大磯の地を選んだ。日本古来の原生林が残る高麗山の麓は、山や森、古木を大切に思う堀にとって、最高の住処となった。2019年2月に没するまで50年以上を過ごし、終の住処となった大磯のアトリエでは、多くの代表作が誕生した。

大磯町での初の展覧会となる今展では、アトリエ近くの相模の海や松並木、大切に育てた庭の草花の本画やスケッチ、初公開となる下図、堀が旅先でみつけた布や雑貨、写真家の飯島幸永氏が記録した「堀文子と大磯」の写真を展示する。また、堀文子のアトリエ、「高麗ホルトノキ」の資料も紹介する。

「自分の住む神奈川県・高麗山（こまやま）を初めて描いて見てはっとした。太古の日本を覆っていた照葉樹林の生き残りのこの原生林には、まだ森の妖精が住んでいて、蝉の鳴く真夏の山に沢山の樹霊の顔が、私を見詰めているのが見えたのある。」（堀 文子／「サライ」2007年19号より）

《日の出》（1972年）堀文子が移住した頃に描いた大磯。

《ゆきさざの宴》スケッチ（2004年）

《紅梅》（2016年）絶筆作品。アトリエの庭に咲く紅梅。

《ケツァール（古代マヤの守護神）》下図（2009年）初公開

下図とは、日本画の構図を決める大事なプロセス。大作ともなると大きさや構図を変えて繰り返し描かれる。

《妖怪と遊ぶ》（2011年）メキシコ、ペルー、ネパールで手に入れた「名もなき者」が作った織物は、作品のモチーフとなり、大磯のアトリエに大事に保管されている。

堀文子が守った高麗ホルトノキ

堀文子のアトリエの前にある長寿の巨木「高麗ホルトノキ」は現在、大磯町指定史跡名勝天然記念物として、町民に親しまれている。この巨木は、かつて再開発で伐採の危機にさらされたが、堀が私財を投じ守った。

大磯町郷土資料館
Oiso Municipal Museum

〒255-0005 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1
県立大磯城山公園内　tel　0463-61-4700
http://www.town.oiso.kanagawa.jp/oisomuseum/

電車/JR東海道線大磯駅 徒歩約30分　バス/大磯駅～城山公園前 徒歩約5分
車/小田原厚木道路 大磯インター約5分 西湘バイパス 大磯西インター約2分